A4-6

鍼治療が有用であった頭部外傷後遷延性意識障害患者2症例

○松本 淳、米澤 慎悟、野村 悠一、池亀 由香、西山 紀郎
兼松 由香里、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院　中部療護センター

【緒言】
交通事故による頭部外傷後遷延性意識障害に対する鍼治療併用後に応答反応の向上が得られた2例について報告する。

【症例】
[症例1] 年齢30歳代男性、脳挫傷、受傷後10か月、当院入院後6カ月、minimally conscious state (MCS)。開眼、追視あり。声掛け等に対する応答反応は見られなかった。
[症例2] 年齢60歳代男性、脳挫傷、受傷後14カ月、当院入院後3カ月、MCS。追視や時に右手指のわずかな自動運動を認めたが、指示動作は認めず意思疎通はできなかった。

【鍼治療】
当院の通常のリハビリテーションや内服治療開始後の安定した状態から鍼治療を併用した。治療穴は水溝、印堂、合谷、足三里を基本穴として、状態に応じて内関や太渓、風池等を加えた。週2回の頻度で4ヶ月間行った。

【評価】
1) 臨床症状の観察
2) 経頭蓋磁気刺激(TMS)による運動誘発電位(MEP)：一次運動野の上肢領域に対してTMSを行い、対側の上肢からMEPを導出した。MEP測定は上記の基本穴への10分間の鍼治療前後に行った。

【結果】
症例1は、鍼治療開始後に声かけに対して頷き動作がみられるようになった。
症例2は、鍼治療開始後に握手等の簡単な指示動作や、挨拶などの簡単な発語による応答がみられるようになった。
MEP測定では、2例とも鍼治療中あるいは鍼治療後に振幅の増加や潜時の短縮がみられた。

【考察およびまとめ】
2例とも鍼治療開始後に応答反応の向上がみられたため、鍼治療併用が有用であったと考えられた。MEP測定の結果から、運動反応の向上に鍼治療による運動皮質の興奮性増加が関与した可能性が考えられた。